

# 小学校・中学校古典教材としての『竹取物語』についての考察

Consideration on 『Taketori Monogatari』 as Elementary School・Junior High School Classical Teaching Material

宮川 久美  
MIYAGAWA Hisami

キーワード：小学校古典教材，中学校古典教材，かぐや姫，帝，昇天図，不死の薬，竹取物語絵巻

Key Words：Elementary School Classical Teaching Materials, Junior High School Classical Teaching Materials, Kaguyahime, Mikado, Ascension View, Medicine of Immortality Taketori Monogatari Picture Scroll

## 1. はじめに

およそ言葉で書かれた文学を享受するには、現代日本語であれ、古語であれ、英語であれ、その媒体である言語を習得する必要がある。言語の学習にはそれなりの労力と気力が必要で、言語を習得してまである作品を読みたい、という動機づけがなければその言語を学ぶ意欲は持てないだろう。入門期の古典学習は、その動機付けの意義が大きい。作中の人物が、遠くかけ離れた昔の、自分とは何の関係もない人であるならば、だれもそんな物語を読みたいとは思わないだろう。したがって、入門期の古典教育は、作品の主題、作中人物の生き方、心情に迫り、児童生徒の共感や感動をよぶようなものであるべきだろう。

そのような教材として、『竹取物語』はふさわしいものであると思われる。小学校国語教科書では、光村図書<sup>1)</sup>，教育出版<sup>2)</sup>，東京書籍<sup>3)</sup>，三省堂<sup>4)</sup>が取り上げている。その内容について表1にまとめてみた。

掲載されているのは冒頭部分、「今は昔、竹取のおきなといふ者ありけり。」から「それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてみたり。」までである。三省堂は冒頭部分に加えて、月からの迎えが来た場面、「かかるほどに、よいうち過ぎて、家の辺り、昼の明さにも過ぎて、光りたり。」から「内外なる人の心ども、物におそわるるようにて、あい戦わん心もなかりけり。」までを掲載している。

『小学校学習指導要領』（現行指導要領・平成23年4月～）「第2章 第1節 国語」の第5学年及び第6学年の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の項には、

### ア 伝統的な言語文化に関する事項

(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。

(イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

とある<sup>5)</sup>。この要領に従うならば、教科書に掲載された『竹取物語』冒頭部分を読んで「内容の大体を知り、音読する。」そしてその古典について「解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知る」ことを求められていることになる。

しかし、物語の冒頭部分だけを読んで全体の話を読まないまま、昔の人のものの見方や感じ方を知ることにはできないだろう。掲載された部分だけを読んで「昔の人は竹の中に光り輝くお姫様がいるなんて話を信じていたんだ。昔の人はロマンチックだなあ」などと感じさせ、それで昔の人のものの見方や感じ方を知ったと思ったとしたら全く誤解である。全文を読んでその作品の主題を知ってこそ、「昔の人」のものの見方や感じ方を受け止めることが

できる。しかし、教科書に原典のまま全文掲載して読むことは不可能であるから、絵本や現代語の要約等で内容を知ることになるだろう。まずは、絵本や要約で物語の全体を読みたいが、その際、大切なのは、作品にとって重要な要素を抜け落ちなく要約することである。本稿では『竹取物語』の主題を考察し、あらすじを語る時に落としてはならない重要な要素を確認したい。

## 2. 『竹取物語』の諸本

それに先だって、『竹取物語』の成立について確認しておきたい。『竹取物語』は、神仙説話、ちいさき伝説、異類誕生譚、致富説話、貴種流離譚、難題婿、仏典、漢籍、日本書紀や続日本紀等、様々な要素を素材として含みつつ、『万葉集』『今昔物語集』『海道記』『古今集為家抄』『古今和歌集序聞書 三流抄』等にさまざまなバリエーションをもって語られている。『万葉集』では翁が神仙の乙女たちの宴会に紛れ込み、気が付いた乙女たちにとがめられ、歌でもって「わしも若いころはもてたのに今こうしてお嬢さんがたに叱られている」とわび、乙女たちが次々と翁に靡き寄るというストーリーである。『海道記』『古今集為家抄』『古今和歌集序聞書 三流抄』では竹林の鶯の卵から生まれたとしている。『今昔物語集』巻第三十一「竹取ノ翁、見付ケシ女ノ児ヲ養ヘル語」では通行本を要約したような内容になっている。

片桐洋一氏は、古活字十行本をはじめとする通行本系統の物語に先行する古『竹取物語』があって、『今昔物語集』の『竹取物語』はそれを梗概化したのではないかと考えている<sup>6)</sup>。このように、さまざまなバリエーションをもった物語が、何度かの改作を経て、一つの主題を持って書き上げられたのが古活字十行本をはじめとする通行本系統の物語だと考えられる。本稿は、古活字十行甲本を底本とし諸本によって校訂した、日本古典文学全集『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(小学館)による。

## 3. 登場人物とあらすじ

### 3-1 登場人物

登場人物は翁とかぐや姫と帝および五人の求婚者である。姫の存在は、翁に配偶者があるということ、すなわちかぐや姫に対する翁の男性としての要素を排除する働きをしている。初めに、

手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の姫にあづけてやしなはす。

とあるように、翁の意思の一部であり、物語の筋には影響を及ぼさない。

### 3-2 あらすじ

以下にあらすじを記す。便宜上、番号を付す。筆者が作品にとって重要な要素と考える部分については下線を付した。3-3において重要な要素について詳述する。

#### (1) 物語の発端

①今は昔、竹取の翁という者があった。野山に分け入って竹を取ってはいろいろなことに使っていた。あるとき根元の光る竹が一本あった。不思議に思ってそばに寄ってみると筒の中が光っていて、それを見ると三寸ばかりの人がとてもかわいらしい様子で座っていた。翁はその子を家に持って帰り、妻に預けて育てさせた。この子を見つけて以来、竹を切るとその節の間に黄金が詰まっているのを見つけることが度重なり、次第に裕福になっていった。

#### (2) 成人・求婚

②この子は三月ばかりの間に成人した。限りなく美しく、家の内には光が満ちあふれ、翁はこの子を見れば体調の悪いときも腹立たしいときも治ってしまうのだだった。成人式を盛大に執り行い、「なよ竹のかぐや姫」と名付けた。

表1 小学校国語教科書における『竹取物語』の取り扱い

	光村図書 『国語 五 銀河』 (2015)	教育出版 『広がる言葉 小学国語 五下』 (2015)	東京書籍 『新編 新しい国語 (2015)	三省堂 『学びを広げる 小学生 の国語 三』 (2015)
教材名	声に出して楽しもう 古典の世界 (一) 「竹取物語」 「平家物語」 「徒然草」 「おくのほそ道」	日本の文化を考えよう 文化 昔から読みつがれている 物語を読み、感想を 書きましょう。 「古典」を楽しむ 「竹取物語」「平家物 語」「伊曾保物語」	日本の言の葉 古文 を声に出して読ん でみよう 「竹取物語」 「平家物語」 「おくのほそ道」	「学びを広げる」読書 の森 はってん 竹取物 語
掲載部分	冒頭原文と現代語訳	冒頭原文と現代語訳	冒頭原文と現代語 訳	冒頭 ・月から迎えが来た場 面の原文と現代語訳
内容	1.古典の定義 2.古典を読み、昔の 人々の心にふれてみ ましょう。 3.言葉のひびきやリ ズムを味わったり、 様子を想像したりし ながら、声に出して 読みましょう。 4.この物語は、今は 、「かぐやひめ」の 名でも知られている 。 5.現実には起こらな いような不思議な出 来事にわくわくする のは、昔の人も、今 のわたしたちも、同 じなのでしょう。	1.古典の定義 2.竹から生まれた小さ な女の子が、美しいひ めに成長し、やがて月 に帰っていく「かぐや ひめ」の物語として知 られている。 3.今も親しまれている『 竹取物語』として絵本 二冊の表紙を紹介。円 地文子・文、秋野不矩・ 絵『かぐやひめ』岩崎 書店 (1967) 本文・解説樺島忠夫、 解説杉本まゆ子『本物 の絵巻を現代語で読む 竹取物語絵巻』勉誠出 版 (2003)	1.古文の定義 2.「かぐやひめ」 のお話は「竹取物 語」がもとになっ ています。 3.古文には、現在 は使われなくなっ た文字や言葉も使 われています。 4.声に出してくり 返し読んで、言葉 のひびきを楽しみ ましょう。	1.「かぐやひめ」の物 語として知られる「竹 取物語」は、日本一古 い物語といわれている 。 2.声に出して読んでみ ましょう。
挿絵	1.昇天の場面 (国立国会 図書館蔵『竹取物語 絵巻』より) →付図1 2.籠に入れて養う場 面 (同)→付図2	1.竹藪から姫を持ち帰る 場面(宮内庁書陵部蔵『 竹取物語絵巻』より)→ 付図3 2.絵本の表紙として昇 天の場面(国立国会図 書館蔵『竹取物語絵巻 』より)→付図1	1.根元が光を発して いる竹と鍬を持っ たおじいさんの絵 (伊勢英子) 2.竹藪の写真 (ア フロ)	障子越しに見える満月 の写真 (アマナイメー ジズ)
教師用指導書に記載された指導目標	(身につけたい力) 1.昔の人のものの見 方や感じかたについ て知ることができる 。 2.古典の文章を音読 し、言葉の響きやリ ズムを味わうととも に、文章の内容の大 体を知ることができる。 『小学国語 学習指 導書 五 銀河 (上) 』	(つけたい言葉の力) 1.親しみやすい古文 について、内容の大 体を知り音読するこ と。 2.古典について解説 した文章を読み、昔 の人のものの見方や 感じ方を知ること。 『ひろがる言葉 小学 国語 5下 教師用指 導書 解説・展開編』	(つけたい力) 古文を音読するこ とで、内容の大 体を知ったり、独特 のリズムや美しい 語調を味わったり する力をつけるこ とを目指している 。 『新編 新しい国語 五 教師用指導書 研究編』	(教材設定の趣旨) 「竹取物語」は、絵本 でも広く読まれてお り、あらすじは児童が すでによく知っている ものである。したがっ て原文だけを提示し ても、ある程度内容 が把握できるだろ う。原文を声に出 して読み、作品の 世界を味わいたい 。 古文独特の言い回し や言葉のリズムを感 じながら、楽しんで 読ませたい。また、 後半は光とともに空 から天人が現れる という、現代のSF 小説にも通じるよ うな幻想的な場面 である。古文に少 し慣れてきたところ で、感情をこめて 表現豊かに読ませ たい。 「竹取物語」の新 しい魅力を実感さ せたい。 『小学生の国語 三 年 学習指導書 ②』

③成人したかぐや姫には多くの男性が言い寄るが、全く相手にされないののでだいに来なくなり、それでも色好み<sup>注1)</sup>といわれる人たち総勢五人の貴公子たちがあきらめず、ころざしのほどをこれみよかしと言い寄ってくる。これを見た翁は、「あなたは変化<sup>へんげ</sup>の人とは言いながらこんなに大きくなるまで育てた私の気持ちは一通りではありません。どうか翁のいうことを聞いてくださらぬか」と熱心な五人のうちの誰かと結婚するよう説得する。姫はころざしのほどを知るためにそれぞれに課題を出すことを提案し、翁も納得するが、その課題が世にあり得ないものばかりなのだった。翁は困惑しながらも五人の求婚者たちにその旨を告げる。彼らは落胆しながらもやはりあきらめきれず、さまざまな方法で課題達成しようとするがいずれも失敗に終わる。

④この話を聞いた帝が内侍中臣ふさ子を使者としてかぐや姫をよく見てくるよう命ずる。しかし、かぐや姫は会おうとしない。使は「帝の命令なのに見ずに帰るわけにはいかない。この世の人間が国王の命令を聞かないなどということはありません。筋の通らぬ事をしてはいけません。」と責めるが、かぐや姫は「国王の命令に背いたというのであれば早く殺して下さい。」と聞いて聞き入れない。報告を聞いた帝も翁を呼び、かぐや姫を宮仕えに差し出すよう命じ、差し出せば五位の位を授けると言う。しかし、やはりかぐや姫は聞き入れず、どうしてもというなら叙爵のあと死ぬだけだという。翁は娘に死なれては何もならない、娘の命が大事と心配し、帝にその旨奏上する。帝はではせめてひと目だけでも見たいと、翁と相談し、狩りに行く体で、にわかには翁の家へ立ち寄り、家の中は光が満ちていて、きよらに美しい人がいる。逃げて奥へ入ろうとするのを袖をとらえて離さず、あまりのすばらしさにやはり御所に連れて帰ろうとすると、「我が身はこの世に生まれたものではないから連れてお帰りになることはできません」といってふと影のように消えてしまう。では無理には連れて帰らないから元の姿を現してと帝が言うとかぐや姫は元の姿を現す。帝は残念でたまらないが仕方なく、魂を後に残した気持ちのまま御所に帰っていく。帰ってからかぐや姫のことが忘れられず、手紙を送る。姫もさすがに情を込めた返事を送り、互いに心を慰め合う。

### (3) 別離

⑤ところが三年ほどするとかぐや姫が月を見ては嘆くようになる。八月十五日も近い頃になるとかぐや姫は人目もはばからずひどく泣くようになる。どうしたことかといききと、自分はこの国の人ではない、月の都の人である。前世の宿縁によってこの世界にやってきたが、今はもう帰らなければならない。今月十五日に迎えが来る。避けられずどうしても行かねばならないので翁が嘆き悲しまれると思うと悲しくてずっと思いついて泣いていたのです、と言ってひどく泣く。翁は「これはなんということをおっしゃるのか。竹の中から見つけたけれども菜種粒ほどの大きさだったのをこんなに大きくなるまで育てた我が子を、いったい誰が迎えに来るといえるのか。絶対に許せない。わしの方こそ死んでしまいたい。」と言って泣きわめくこと、本当に堪えられない様子である。かぐや姫、「私は月の都の人で、かの国の父母もいます。短い間とてこの国に来たけれど、このように長い年月を過ごしてしまいました。かの国の父母のことも覚えていません。この国ではこのように長く居させていただいて親しませていただきました。帰るといってもうれしいとも思わず、ただ悲しいばかりです。けれど心ならずも去って行くとしているのです。」と言って翁と共にひどく泣く。

⑥このことを帝がお聞きになって、「私のようにひと目見ただけでも忘れられないのに明け暮れ見慣れたかぐや姫を月の世界にやっちゃってしまっただけで翁はどんなにつらいだろう。」と思いやり、多くの兵士を遣わして翁の家を守らせた。

⑦しかし、大空から迎えが来ると、人々は物に襲われたように戦う気力を失い、姫を閉じ込めた所の戸も自然に開き、姫が抱いていたかぐや姫は外に出てきた。かぐや姫は翁が心乱れて泣き伏しているところに寄って「私も心ならずもこのように去って行くのですからせめて天に昇るのだけでも見送って下さい。」と言う。しかし翁は「なんのためにこんなに悲しいのを見送らなければならないのか。わしをどうせよと言って捨て

て昇ってしまわれるのか、一緒に連れて行って下さい。」と泣き伏しているのが姫の心は乱れる。「手紙を書き置いて行きましょう。恋しい折々に取り出して見て下さい。」と言って書く手紙には「この世に生まれたのだったら翁を嘆かせない時までずっと居ることもできましょう。このように去って別れてしまうことは返す返すも不本意に思われます。脱ぎ置く着物を形見と思って見て下さい。月の出た夜は見て下さい。お見捨てして去って行く空からも落ちてしまうような気がします。」と書き置く。

⑧天人の中の一人に持たせてある箱がある。一つには天の羽衣が入っている。またある箱には不死の薬が入っている。天人の一人が「壺の中の薬を召し上がれ。汚いところの物を召し上がったのでご気分が悪いでしょう。」と言って持って寄ってきたので、少なめて、形見にと脱ぎ置く着物に包もうとすると、そこにいた天人が包ませない。そして天の羽衣を着せようとする。

⑨その時にかぐや姫は「しばし待て。天の羽衣を着せた人は心が全く異なってしまうと言います。物一言言い置くことがあったのだった。」と言って手紙を書く。天人は、遅い、と言っていららする。かぐや姫は「わからぬことを言いなさるな」といって非常に静かに帝に差し上げるお手紙を書く。落ち着いた様子である。その手紙は次のようなものだった。

このように多くの人をおつかわし下さってとどめようとしてくださいましたが、許さぬ迎えがやってきて私をとらえて連れて行きます。おそばにお仕えしなかったのも、このように煩わしい身の上だったからです。わからないこととお思いになったことでしょう。強情に仰せを承らなかつたことを失礼な奴だとお心におとどめになっていることだろうと思うと今も心残りです。

今はもうこれまでと天の羽衣着る時こそあなた様をしみじみと思い出しておりますこの手紙に壺の薬を添えて、頭中將を呼び寄せて帝に献上する。まず、かぐや姫から天人が受け取って中將に渡す。中將が受け取るとさっと天の羽衣を着せる。すると翁をいとおしい、不憫だと思っていた気持ちもなくなってしまう。この羽衣を着た人は物思いがなくなってしまうので飛ぶ車に乗って天人を百人ばかり引き連れて昇ってしまった。

⑩残された翁と嫗は血の涙を流して思い乱れるけれどもどうにも仕方がない。あの書き置いて行った手紙を読み聞かせても「何にもならない。命も惜しくない。誰のために命を惜しむのだ。何事も意味がない。」と言って薬も飲まずそのまま起き上がることもできず病み伏せっている。

#### (4) 帝の決意

⑪中將は御所に帰り、かぐや姫をとどめることができなかつたことをこまごまと帝に報告する。薬の壺にお手紙を添えて献上する。手紙を広げてご覧になってとてもしみじみとされ、物も召し上がらず音楽の演奏などもなさらない。

⑫帝は大臣や上達部を呼んで最も天に近い山を尋ね、

会うこともない涙に浮かぶ我が身にとって不死の薬も何になろう

と歌を詠まれて、かぐや姫が献上した不死の薬の壺に手紙を添えて使いに持たせ、駿河の国にあるという最も天に近い山の頂上でお手紙と不死の薬の壺を並べて火を付けて燃やすべきことをお命じになる。

⑬その命を承って武士を大勢連れて山に登ったのでその山を「富士の山」と名づけたのである。その煙は今もなお雲の中に立ちのぼっていると言いつづけている。

#### 3-3 重要な要素および読者に想像させたいこと

次に、あらすじの中で落としてはいならないと筆者が考える重要な要素と子どもたちに想像させたいことについて詳説したい。

①は物語の発端。小学校国語教科書には、この部分しか原文が掲載されておらず（三省堂の教科書は来迎の場面も掲載されている）、中学校一年国語教科書すべてに共通して掲載される部分でもある。ところが、この部分の些末なことに拘泥する授業展開がなされることが

ある。たとえば、福田景道氏は、『竹取物語』には初期の物語文学の性質として不完全、説明不足、不整合などの瑕疵があり、翁が竹を切ったという表現がないため、生徒は翁は竹を切ったのかどうか、切ったとしたらどうして中のかぐや姫は切られずに無事だったのか、などという違和感や矛盾に捕らわれてしまい、それらを消し去ることは授業担当者には難しいと述べている<sup>7)</sup>。しかし、児童生徒の興味関心がこのようなところに向かったならば、議論詮索して彼らが違和感や矛盾に捕られる前に、衣通姫<sup>注2)</sup>などの例も出し、衣を通して光を発する、竹の筒を通して光を発するほどの美しさという伝統的表現があることや、竹の神秘的な成長の早さと姫がわずか三月で成人するという異常成長譚に目を向けさせるべきであろう。竹を切ったか、切らなかったのか、ではなく、そもそも異常な出生をしたのである。

また、吉田雅憲氏は、絵本を援用して、例えば、

翁が分け入った「野山」とは翁の家から遠いのかどうか。「野山」の木々はうっそうと茂って薄暗かったりするのかどうか。(中略)「ある日」とは、いつの季節のことなのか。今、何時頃なのか—あたりは明るいのか暗いのか。竹筒の光とは、どんな光り方をしていたのか。また、何かしらの音は聞こえてこないのかどうか。さらにまた、「手ののるぐらいの小さな人」を見つけた時、翁は不思議だと思わなかったのか。恐いとは思わなかったのか。「小さな人」はどうして竹の中にいたのか。そもそも語り手自身はこの話をどう思っているのか。

などということ想像させ、なぜそう思ったか理由を述べさせワークシートに書かせる授業展開を提案している<sup>8)</sup>が、このような想像は、したところで主題には関係ないし、感動のしようもない。児童たちは古典とはまことにつまらないものだと思うだろう。

いずれにせよ、このようなことに拘泥しては、物語全体を知って昔の人のものの考え方を知る、ひいては古典を是非読みたいという欲求を抱かせることはできないと思われる。想像すべきことは読み進んだ先にある。

②で家中に光が満ちあふれ、この子を見れば体調の悪いときも腹立たしいときも治ってしまうとあった。これは言葉の綾ではない。大多数の子どもを持った親が実感する事である。かぐや姫が翁にとってどれほど癒やしであったか想像させたい。

③の翁が結婚をすすめる場面。自分が生きている間はいいけれど、老い先短い自分の亡き後、女の身で一人ぼっちになってしまう娘のことが心配でたまらない。誰か信頼できる人と結婚させたいという親の気持を想像させたい。現代の子どもたちは女の幸せは結婚だとは必ずしも思っていない。一人で幸せに自己実現して生きることもできる時代である。しかし、この時代はそうではない。例えば、『日本霊異記』中巻第三十四縁「<sup>みなしご</sup>孤<sup>をみな</sup>の嬢女<sup>あ</sup>観音の銅<sup>あ</sup>の像<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>憑<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>敬<sup>あ</sup>ひ<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>奇<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>き<sup>あ</sup>表<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>示<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>現<sup>あ</sup>報<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>得<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>縁」に

諸<sup>あ</sup>楽<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>右<sup>あ</sup>京<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>植<sup>あ</sup>槻<sup>あ</sup>寺<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>辺<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>里<sup>あ</sup>に、一<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>孤<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>嬢<sup>あ</sup>有<sup>あ</sup>り。い<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>だ<sup>あ</sup>嫁<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>ず、夫<sup>あ</sup>無<sup>あ</sup>し。姓<sup>あ</sup>名<sup>あ</sup>詳<sup>あ</sup>ならず。父<sup>あ</sup>母<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>有<sup>あ</sup>ける<sup>あ</sup>時<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>は、多<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>饒<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>して<sup>あ</sup>財<sup>あ</sup>富<sup>あ</sup>み、数<sup>あ</sup>屋<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>倉<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>作<sup>あ</sup>り、観<sup>あ</sup>世<sup>あ</sup>音<sup>あ</sup>菩<sup>あ</sup>薩<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>銅<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>像<sup>あ</sup>一<sup>あ</sup>体<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>鑄<sup>あ</sup>奉<sup>あ</sup>る。高<sup>あ</sup>二<sup>あ</sup>尺<sup>あ</sup>五<sup>あ</sup>寸<sup>あ</sup>な<sup>あ</sup>り。隔<sup>あ</sup>家<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>仏<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>殿<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>成<sup>あ</sup>して<sup>あ</sup>彼<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>像<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>安<sup>あ</sup>き<sup>あ</sup>之<sup>あ</sup>れを<sup>あ</sup>以<sup>あ</sup>ち<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>供<sup>あ</sup>養<sup>あ</sup>す。聖<sup>あ</sup>武<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>天<sup>あ</sup>皇<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>御<sup>あ</sup>世<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>父<sup>あ</sup>母<sup>あ</sup>命<sup>あ</sup>終<sup>あ</sup>り、奴<sup>あ</sup>婢<sup>あ</sup>逃<sup>あ</sup>げ<sup>あ</sup>散<sup>あ</sup>れ、馬<sup>あ</sup>牛<sup>あ</sup>死<sup>あ</sup>に、財<sup>あ</sup>失<sup>あ</sup>ひ<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>家<sup>あ</sup>貧<sup>あ</sup>しく<sup>あ</sup>して<sup>あ</sup>独<sup>あ</sup>空<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>き<sup>あ</sup>宅<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>守<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>昼<sup>あ</sup>夜<sup>あ</sup>哀<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>び<sup>あ</sup>啼<sup>あ</sup>く。

とあり<sup>9)</sup>、また、『宇津保物語』の「俊蔭」の娘も

容<sup>あ</sup>貌<sup>あ</sup>更<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>い<sup>あ</sup>ふ<sup>あ</sup>か<sup>あ</sup>ぎ<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>な<sup>あ</sup>し。あ<sup>あ</sup>た<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>光<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>輝<sup>あ</sup>き<sup>あ</sup>て、見<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>人<sup>あ</sup>眩<sup>あ</sup>き<sup>あ</sup>マ<sup>あ</sup>で<sup>あ</sup>み<sup>あ</sup>ゆ。心<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>う<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>う<sup>あ</sup>じ<sup>あ</sup>き<sup>あ</sup>こ<sup>あ</sup>と、世<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>聞<sup>あ</sup>え<sup>あ</sup>高<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>て、帝<sup>あ</sup>、東<sup>あ</sup>宮<sup>あ</sup>、父<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>召<sup>あ</sup>す。娘<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>御<sup>あ</sup>文<sup>あ</sup>た<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>へ<sup>あ</sup>ど、我<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>御<sup>あ</sup>返<sup>あ</sup>事<sup>あ</sup>き<sup>あ</sup>こ<sup>あ</sup>え<sup>あ</sup>ず、女<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>御<sup>あ</sup>返<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>せ<sup>あ</sup>さ<sup>あ</sup>せ<sup>あ</sup>ず。さ<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ぬ<sup>あ</sup>上<sup>あ</sup>達<sup>あ</sup>部<sup>あ</sup>、御<sup>あ</sup>子<sup>あ</sup>た<sup>あ</sup>ち<sup>あ</sup>は、ま<sup>あ</sup>して<sup>あ</sup>御<sup>あ</sup>文<sup>あ</sup>見<sup>あ</sup>い<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>べ<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ず。

とあるように<sup>10)</sup>、かぐや姫と同様に光り輝く美しさで、帝や東宮が父に娘を宮仕えさせるよう召すが、自らも返事もせず、娘にもさせない。それほどでもない貴族や御子達の場合は御文を見ることもしない。しかし、娘が十五歳の時に母が亡くなり、つづいて父も病に伏す。「我子の行くさきの掟せなりぬ」——親として娘の将来のために決まりをつけてやらないままになってしまった——とあって父俊蔭は亡くなる。父母亡き後、使用人は一人残らず去り、通りかがりの方が誰も居ないと思って家を壊して持って行き、寝殿一つのみ残ってまるで野原のようになり、父が所有していた荘園からも年貢が届けられなくなり、困窮をきわめる。『源氏物語』の末摘花も常陸宮の一人娘だが、父親を早くに亡くして困窮する。後ろ盾をなくした娘はこんな風に零落してしまう時代だったのである。「我子の行くさきの掟せぬ」死ぬことを翁がどんなに心配したか、想像させたい。姫は親のいうことをひたすら拒否して翁が悲しみ嘆き心配するのが気の毒なので、結果的に結婚せずに済むようありえないものを求めるのである。

求婚者は五人で、彼らの対応も、安直に奈良の古寺から鉢を拾ってくるものから大げがをするものまでいろいろであるが、これらは話を面白おかしくするための舞台装置である。難題が何であれ、求婚者の数が五人であれ三人であれ重要なことではない。数々の駄洒落も同様である。物語の筋としては、この世の人間とかぐや姫とは結ばれることのない運命にあったということがわかればよい。そしてそのことを翁も求婚者たちも知らず、かぐや姫だけが知っていたのである。

④の帝がかぐや姫に求婚する場面について。帝はこの世の最高権力者であり、使いの中臣ふさ子も会うことを拒否する姫に対して「この世の人間が国王の命令を聞かないなどということはあり得ない。筋の通らぬ事をしてはいけない。」と責める。報告を聞いた帝も翁を呼び、かぐや姫を宮仕えに差し出すよう命じ、差し出せば五位の位を授けると言う。しかし、かぐや姫にとってこの世の権力など意味がない。恐れることなく、激しく拒否する。「五位」からは昇殿を許される貴族の仲間入りであり、当時の役人が一生かかって懸命に働いても到達することのできない高い位である。官位を授けると言われて翁がこのすごい話にうれしいと思ったのも無理はない。かぐや姫の事情を知らない翁は、絶対にどうしても結婚できない深刻な理由があるとまでは思っていなかったのである。しかし、それなら宮仕えして翁が叙爵されたらすぐ死ぬとまで言われ、冠位をもらってもわが子を見ることができなくなっては何にもならない、あなたの命が大事だといって断りに行くのである。この世のルールで生きている翁にとって、帝の仰せを拒否するのは大変なことなのだけれど、わが子の命には代えられない。このあたりの翁の気持ちも想像させたい。②と③に描かれた親の気持ちを子どもに想像させることができれば、自らの親たちの気持ちを知るきっかけにもなるのではないだろうか。

帝は結婚はあきらめるが、それでも一目見たいと翁の家にやってくる。そして一目見るとあまりのすばらしさにやはり連れて帰りたくなってしまふ。しかし、かぐや姫は変化の人なのでふと姿を消してしまう。それで仕方なく帝は帰っていくのだが、帰ってから姫のことが忘れられず、手紙を送る。姫もさすがに情を込めた返事を送り、互いに心を慰め合う。この、「互いに心を慰め合う」というところは大切である。姫と帝は結婚はできないけれど心は通じ合い、慰めあうのである。

それはなぜか。帝と五人の求婚者とはどこが違うのか。身分や最高権力者であるということは姫にとって何の意味もない。違いは帝の出自である。記紀の天孫降臨神話によれば、帝は天から降った天神の孫のアマツヒコヒコホノニギの子孫である。つまり、帝の出自は天なのである。もともと、アマツヒコヒコホノニギは下界を統治せよとの命を受けて地上に降り立った。そしてコノハナノサクヤビメとだけ結婚し、姉のイハナガヒメを召し入れなかったという話を通じて、死すべきものとして生きることになった理由が語られる<sup>注3)</sup>。理由付けはともかく、アマツヒコヒコホノニギは死すべき人間として生きることを覚悟して天から降ったのである。

したがって、帝といえどもやはりかぐや姫と結ばれることはできないが、心は通じ合うの

である。そして結ばれない悲しみを互いに慰めあうことができるのである。

この物語のうちでもっともその登場人物の心情がひしひしと伝わるのは、やはり(3)別離で別離の嘆きを描いた⑤、昇天の場面⑦・⑧・⑨だろう。大事な娘が去って行く、心ならずも去らねばならない娘の方も去られる親の方もつらく悲しい。泣き伏す翁のために娘が書き残した手紙には、年老いた親を見捨てるようにして去っていかねばならない娘の悲しみが満ちている。翁にとってかぐや姫はこの世の光であり癒しであった。娘の心情、翁の心情を想像させ共感させることができるとよい。

この世は四苦八苦<sup>注4)</sup>に満ちた世界である。そうでない世界、例えば月の都とはどうしようもない断絶があるのである。翁は生老病死の苦しみから逃れられない。そして今、愛別離苦のさなかにある。死すべき人間である翁は、たまさか奇跡的な縁があつてかぐや姫に出会ったが、いつまでも同じ世界に暮らすことはできない。かぐや姫もまた、たまさか宿縁によってこの世にあらわれたがいつまでもこの世にいるべきものではない。

⑨で娘が翁に形見にと脱ぎ置く着物に不死の薬を包もうとしたとき、天人が包ませない。

⑩では帝に静かに手紙をしたためる。事情を話せないまま強情に拒否したことで、きっと嫌な女だと思われているだろう、それが心残りだという。本当は好きなのにどうしても言えない事情があつて、嫌われたくないのに、たとえ嫌な女だと思われても拒否し続けなければならない、そのつらい気持ちは子どもにもわかるだろう。

そして不思議なことは、翁への形見の着物に不死の薬を包むことを許さなかった天人が、帝へは手紙とともに頭中将へ取り次いでいることである。これはなぜか。これも帝の出自による。帝はもともと天の神であつた。不死を容れる器を持っている。或いは、不死の薬を取り扱う能力がある。翁は死すべき人間である。不死を容れる器ではない。だから天人は帝へは不死の薬を取り次いだが、翁には包ませなかったのである。作者がわざわざこのように記述したということには重要な意味がある。(4)帝の決意の⑩で翁が「薬も飲まず」とあるのは不死の薬ではない。通常のこの世の薬である。かぐや姫は希望の光であり癒しであった。子を失っては生きていてもしょうがない、血の涙を流して嘆くのである。「血涙」はふつうの涙では表現しきれない、度を越した悲しみ、いきどおりに流す涙をいう。どんなに悲しいか、子を失った親の気持ちを想像させたい。

#### 4. 『竹取物語』の主題

物語はある人の生き方考え方を描くことによって読者に何かを伝えようとする。それがその物語の主題である。人の生き方考え方が表れるのは、その人がある事態に立ち至ったときにどのような決断をするかによってである。この竹取物語の中で唯一ストーリーに関わる重大な決断をした人物は帝である。翁もかぐや姫も別離の定めに抗すべくもなく互いに泣きながら引き裂かれていった。選択の余地はなかった。しかし帝は不死の薬を手にした。そして⑬で帝は受け取った手紙と不死の薬を天に最も近い山の上で焼かせる。自分の意志で、不死の薬を天に返す決断をする。すなわち、死すべき人間として生きることを心も新たに決断するのである。そういう意味でこの物語の主人公は帝である。この世の人間は死すべきものであり、死すべきものとして苦しみを負って生きる覚悟で生きるほかはないというのがこの物語の主題ではないだろうか。この世の四苦八苦を引き受けて生きる覚悟を持つことは容易ではない。皆、覚悟がないままその苦しみに襲われてうろたえ、嘆き悲しみ、一層苦しみを深くする。帝はこの世の四苦八苦を我がものとして引き受けて生きて死ぬ覚悟を示したのである。帝にはその覚悟を持つ資質があつた。だからこそ天人は、不死の薬を、翁に残す形見の着物には包ませなかったのに、帝へは取り次いだのである。

昇天の場面⑩では、天の羽衣を着せた人は心が全く異なってしまう、物思いがなくなつて、翁をいとおい、不憫だと思っていた気持ちもなくなつてしまったとある。そして飛ぶ車に乗って天人を百人ばかり引き連れて昇ってしまう。ということは、⑧でかぐや姫は「手紙を書き置いて行きましょう。恋しい折々に取り出して見て下さい。月の出た夜はこちらの方を見て下さい。」と言っているが、姫のほうはもはや翁を月から見ているということはない



い。あれほどいつくしんで育てたかぐや姫はもはや翁を思い出すことすらないのである。この断絶は、喪失感を一層深くする。死すべき人間はこのような別れの悲しみを引き受けなければならない。これがこの時代の人々の、あるいは少なくともこの作品の作者のものの考え方なのである。そしてこれこそがこの作品の主題であろう。死すべき人間が死をどのように受け入れるかという問題は、「昔の人」にとっても、今を生きる人たちにとっても最も深刻な問いであるという点では変わりがないのである。

子どもたちの中には、死んでもまた生き返ることができると思っているものがあるという<sup>注5)</sup>。あるいは死んだ人は星になって空から自分を見ていてくれると信じる人もいるだろう。あるいはお仏壇の中にいるとか、あるいはお墓の下にいるとか、いや、風になって空をふきわたっているのだとか、自分も死ねば、先に死んだ人が待っていてくれてまた会えるとか、様々なイメージを持っているかもしれない。しかし、この作品は、二度と会えない、もはや死んだ人はこの世に残した人を思い出すことすらない、と考えているのである。何という深い喪失感であろう。しかし、それが死すべき人間の宿命であり、そのことを自分のこととして従容として受け入れて生きるほかない、というのがこの作品の主題であると考えられる。

## 5. 挿絵・絵本について

教科書の挿絵について。注意すべき点が二つある。一つは昇天図においてかぐや姫が振り返っているか否かである。これについては久保木寿子氏<sup>11)</sup>、中島和歌子氏<sup>12)</sup>、齋藤 緋紗依氏<sup>13)</sup>等の優れた先行研究がある。天の羽衣を着せかけられたかぐや姫の心はこの世の心を失ってしまっているのだから、振り返らず百人ばかりの天人を引き連れて昇っていったはずである。この点、国立国会図書館蔵『竹取物語絵巻』(付図1)の昇天図のかぐや姫は小桂姿で車の中に座り、簀子際の室内に座って泣く翁媪のほうを見ている。昇天の場面のかぐや姫の装束は、原文に即すれば、この世の衣は形見にと脱ぎ置き天の羽衣を着ているはずである。しかし、天の羽衣は描かれていない。小学校の国語教科書では、表1に示したように、光村図書と教育出版がこの国立国会図書館蔵『竹取物語絵巻』の昇天図を載せている。他の二社は昇天図を載せない。絵本にも、振り返らない後ろ姿を描くものと振り返っている姿を描くものがある。装束も現世の着物を着たまものもの、あるいは天の羽衣らしきものを着ているもの、天人とともに描かれているもの、天人が描かれていないものなど、相違点がある。小学生の場合、いろいろな絵本を読み比べてこのような相違点に気づけば、それをきっかけに原文に当たり、どの絵がもっとも原文の内容と合っているか話し合わせる機会となるだろう。

今一つ注意すべき点は、不死の薬である。不死の薬について、絵本では、まったく触れず、昇天の場面で終わるものが多い。これは、子供向けということに配慮して、死すべき人間の別れの悲しみを描くにとどめ、死すべき人間として生きる覚悟を示す決断までは描いていないのだと思われる。ところが、不死の薬を帝だけでなく翁にも渡したとする絵本がある<sup>14)</sup>。これは明らかに原文と相違する<sup>注6)</sup>。かぐや姫が翁への形見の着物に不死の薬を包もうとしたとき、そこにいた天人が包ませなかった、と明記されているからである。原文を読めばわかるように、翁への手紙を書いたところに天人が天の羽衣と薬の入った箱を持ってきて薬を召し上がれといい、姫はその薬を少しなめて残りを形見の着物に包もうとしたところを天人が包ませず、すぐにも羽衣を着せようとするのを制して、せかす天人をたしなめながら帝への手紙を書き、その手紙と薬の壺が天人を介して頭中将に渡ったとたんに天の羽衣を着せられてしまったのである。薬は翁には渡せていない。天人が翁には包ませなかったが帝へは取り次いだとわざわざ物語る理由については「3-3 重要な要素および読者に想像させたいこと」で述べたとおりであるが、しかし、絵本には不死の薬を省略したものが多いため小学校で扱うのは難しいかもしれない。死すべき人間が死をどのように受け入れるかという問題は、「昔の人」にとっても、今を生きる人たちにとっても最も深刻な問いであり、帝が不死の薬を天に返したのは、死を自分のものとして従容として受け容れる決意によるものであるが、小学生には、親子の情愛と避けることのできない死別の悲しみについて

共感させることができればよいのではないかと思う。中学校ではすべての教科書で再び『竹取物語』に出会うことになる。そこで不死の薬の意味について考えさせたいと思う。

## 6. 中学校国語教科書における昇天図・不死の薬・山頂で焼かせた御手紙

中学校の国語教科書では五社すべてが不死の薬について描くが、その中にも、「かぐや姫は、翁と嫗、そして帝に不死の薬を残しますが」とするものがある<sup>15)</sup>。これは前節でも述べたように、明らかに原文に相違する誤りである。

表2は、中学校国語教科書の竹取物語における昇天図と不死の薬についての一覧である。光村図書<sup>16)</sup>と三省堂<sup>17)</sup>は国立国会図書館蔵『竹取物語絵巻』の昇天図(付図1)を載せ、教育出版<sup>18)</sup>は、国學院大學附属図書館蔵『竹取物語絵巻』(小型本)の昇天図(付図5)を載せる。教育出版は昇天図の下に「かぐや姫は天人とともに天に昇った。」と記すが、国學院本には天人は描かれていない。雲の上に乗る網代車と見返らないかぐや姫のみ。装束は十二単、羽衣は描かれていない。見返らないという点では、この世の心をすっかり失ってしまったという内容にふさわしい。東京書籍<sup>19)</sup>と学校図書<sup>20)</sup>は昇天図を載せない。

また、帝が山頂で不死の薬とともに燃やした手紙はかぐや姫から贈られた手紙か、帝自身がしたためた手紙か、解釈に違いがある。

中将、人々引き具して帰り参りて、かぐや姫をえ戦ひとめずなりぬること、こまごまと奏す。薬の壺に①御文そへて参らす。ひろげて御覧じて、いとあはれがらせたまひて、物もきこしめさず。御遊びなどもなかりけり。

大臣、上達部を召して、「いずれの山か天に近き」と問はせたまふに、ある人奏す。「駿河の国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近くはべる」と奏す。これを聞かせたまひて、あふこともなみだにうかぶ我が身には死なぬ薬も何にかはせむ②かのたてまつるふしのくすりに又つぼぐして、御使ひに賜はず。勅使には、つきのいはがさといふ人を召して、駿河の国にあなる山の頂に、持てつくべきよし仰せたまふ。峰にてすべきやう教へさせたまふ。③御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし、仰せたまふ。

下線部①の「御文」はかぐや姫が帝に書き残した手紙である。下線部②は本文に異同がある。底本(古活字十行本)では下線部のようになっていて、不死の薬はかぐや姫が奉った当初から壺に入っていたのであるから「壺具して」では意味が通じない。そこで「又」を「文」の写し間違いと見て、「かの奉る不死の薬に、文、壺具して」と解する案<sup>21)</sup>や、さらに大幅に改訂して「かの奉る薬壺に文具して」と解する案<sup>22)</sup>などがある。前者では、下線部③の「御文」を「死なぬ薬も」の歌を含む帝の手紙。薬を焼くわけを天界に訴えた行為。」とする。後者はどちらとも明記していない。中学校国語教科書では、三省堂が下線部③の「御文」を「死なぬ薬も」の歌としている。一方で、教育出版と学校図書はかぐや姫が帝に奉った手紙としている。光村図書は原文を掲載しているがどちらかはわからない。東京書籍はあらすじを記すが、焼かせたものとして「不老不死の薬」のみ挙げ、「御文」のことには触れていない。

富士山頂で焼かせた手紙が帝自らしたためた歌と手紙であったとすると、自らの思いを天上のかぐや姫に訴えようとしていることになる。これは帝の決意と矛盾する。帝が不死の薬を天に最も近い山で焼かせたのは、これを天に返し、死すべき人間の宿命を自分のこととして従容として受け入れて生きて死ぬ覚悟による。かぐや姫とかぐや姫の属する世界との決別を改めて決意してのことである。とすれば、今、自らの気持ちをかぐや姫に訴えようとはしないはずである。かぐや姫の手紙には帝を思う気持ちが綴られていた。帝はこれを天に返したのである。かぐや姫はもはやこの世の人ではなく、この世の心も持っていないという深い喪失に耐え、自らはこの世の人間として生きて死ぬ決意をしているのである。山頂で焼

表2 中学校国語教科書における昇天図と不死の薬および焼いた手紙

教科書	光村図書『国語1』(2015)	教育出版『伝え合う言葉 中学校国語1』(2016)	東京書籍『新編 新しい国語1』(2015)	三省堂『現代の国語1』(2015)	学校図書『中学校国語1』(2015)
教材名	蓬莱の玉の枝―「竹取物語」から	物語の始まり―竹取物語―	竹取物語	竹取物語	姫の物語? 翁の物語? ―竹取物語
昇天図と昇天の描写	<p>国立国会図書館蔵『竹取物語絵巻』→付図1</p> <p><u>あらすじ</u> pp.152-153 「かぐや姫は、翁には着ていた衣を、帝には天人の持参した不死の薬を、それぞれ手紙を添えて残し、人々の悲しみを後に天に昇って行ってしまった。」</p>	<p>国学院大学附属図書館蔵『竹取物語絵巻』(小型本)→付図5</p> <p><u>原文と現代語訳</u> pp.116-117 「ふと天の羽衣うち着せたまつりつれば、翁を、「いとほし、かなし。」と思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、もの思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ。」(現代語訳は省略)</p>	<p>昇天図なし 小林古径(1883-1957)画「竹取物語」第四段 別離より別離を悲しむかぐや姫と翁姫侍女たちの図を載せる。→付図4</p> <p><u>あらすじ</u> p.146 「かぐや姫が天の羽衣を切ると、翁をかわいそうに思っていた気持ちも失せてしまいました。天の羽衣を着ると、人間の感情もなくなってしまうのです。かぐや姫は空を飛ぶ車に乗って、百人ほどの天人を従えて天に昇ってしまいました。」</p>	<p>国立国会図書館蔵『竹取物語絵巻』→付図1</p> <p><u>あらすじ</u> p.112 「帝に手紙を書いた。(略)これに不死の薬を添え、頭中将に託した。そのとき、天の羽衣が着せられた。姫はそれまでのことを忘れたように、さっさと飛ぶ車に乗り、天人を引連れて天に昇ってしまった。」</p>	<p>昇天図なし 武田祐吉氏旧蔵・国学院大学附属図書館蔵『竹取物語絵巻』より迎への到来図を載せる。→付図6</p> <p><u>原文</u> p.177 「ふと天の羽衣うち着せたまつりつれば、翁を、「いとほし、かなし。」と思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、もの思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ。」</p>
不死の薬	<p><u>原文</u> p.154 「御文、不死の薬の壺並べて、火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。」</p>	<p><u>あらすじ</u> p.117 「落胆した帝は、その後、臣下に命じて、かぐや姫から渡された不死の薬と手紙を、都から近く天からも近い山を探して、その山頂で焼かせました。」</p>	<p><u>あらすじ</u> p.146 「帝はかぐや姫から渡された不老不死の薬も何になろうと言われて、大勢の兵士たちを天に一番高い山に登らせて焼かせました。」</p>	<p><u>あらすじ</u> pp.112-113 「頭中将は、薬と手紙を帝に献上した。(帝は)…歌を詠んだ。…この歌をこの山の頂上で不死の薬とともに燃やすように命じられた。」</p>	<p><u>あらすじ</u> p.178 「帝は、その手紙とつぼの薬を、天に最も近い富士の山頂で焼かせてしまいました。」</p> <p><u>解説</u> p.179 「かぐや姫は、翁と姫、そして帝に不死の薬を残しますが、彼らはこれを手にしようとはしません。」</p>
手紙	不明	かぐや姫からの手紙	記載無し	帝の歌	かぐや姫からの手紙

いた手紙を帝の気持ちをかぐや姫に訴える手紙としてしまっただけでは、天と地上の厳しい断絶を描いた竹取物語の主題があいまいになる。この点も中学生ならば注意して考えることができれば、よりこの作品の主題に迫ることができると思われる。

表3 『竹取物語』絵本の内容の比較

内容 作者	帝の求婚	不死の薬	帝への手紙	羽衣を着るとこの世の心を失う	振り返り	姫からの手紙の焼却	不死の薬の焼却
1 いもと ようこ <sup>23)</sup>	なし	お礼に不老不死の薬をおじいさん、おばあさんに渡した	なし	記載なし	振り返る	なし	おじいさんとおばあさんは不老不死の薬をたかいたかいやまに埋めた
2 岩崎京子 <sup>24)</sup>	あり	なし	なし	羽衣を着せてしまうと月の世界のものとなり、この世のことは忘れてしまう	振り返る	なし	なし
3 江國 香織 <sup>25)</sup>	あり	あり	あり	原文通り忠実に現代語訳	振り返らない	なし(帝が詠んだ歌を薬に添えて焼却)	あり
4 円地文子 <sup>26)</sup>	あり	なし	あり	天の羽衣を着ると人間の悲しみや喜びを忘れた天人になってしまいました	振り返らない		
5 千葉幹夫 <sup>27)</sup>	あり	なし	なし	天の羽衣を着たかぐや姫はもう天人になり、人の世界のことは、すべて忘れてしまいました	振り返らない	なし	なし
6 土家由岐雄 <sup>28)</sup>	あり	なし	なし	羽衣に着替えてから挨拶	車の中で姿は見えない	なし	なし
7 西本鶏介 <sup>29)</sup>	なし	なし	なし	羽衣を着た後、両親に挨拶して形見の着物を渡す	天女の後姿のみ 姫は車の中で見えない	なし	なし
8 平田省吾 <sup>30)</sup>	あり	なし	なし	記載無し	ふりかえり、ふりかえり手をふっている	なし	なし
9 船崎克彦 <sup>31)</sup>	あり	なし	あり	羽衣を着ると今までのことを忘れてしまう	振り返らない	なし	なし
10 柳川茂 <sup>32)</sup>	あり	なし	なし	記載無し	振り返らない	なし	なし
11 森山京 <sup>33)</sup>	あり	おじいさんとおばあさんに形見の着物、帝にお別れの手紙を書き、不死の薬の壺を添えておじいさんにことづけました。	あり	天人にもどり、人間世界のことはなにもかも忘れ去ってしまいました。嘆き悲しむおじいさんとおばあさんにも、もう心を動かされることはありませんでした。	振り返らない	なし	あり

## 7. 終わりに

以上のように、絵本を用いる場合も、教科書の挿絵や絵巻の写真などを参考資料として参照する場合も、見比べてその違いに気付かせ、確かめるために本文に当たり、その意味を考えさせることができれば発展学習につながるだろう。また、本文の違いについても気づき、その意味を考えさせることができれば主題に迫る手がかりとなるだろう。さらに、それぞれ気付いたことを話し合わせ、発表させれば、「C 読むこと」だけでなく、「B 書くこと」「A 話すこと・聞くこと」の学習にもつながり、『竹取物語』についての興味がいつそう深まるものと思われる。参考までに表3に絵本による内容の違いを一覧にした。

### 注釈

注1) 「色好み」とは、恋愛の情趣をよく解し、和歌や音楽・芸能に優れ、女性の心を引き付けるのに巧みで、洗練された恋愛ができること、またそのような人をいう。

注2) 衣通姫については、『日本書紀』や『古事記』に次のような記載があるように、身から光を発してそれが衣を通して照っていたという。「弟姫、容姿絶妙にして比<sup>たぐひ</sup>無し。其の艶色、衣を徹して晃れり。是を以ちて、時人、号けて衣通郎姫と曰す。(允恭天皇七年十二月)」<sup>34)</sup>

「軽太郎女、亦の名は、衣通郎姫<sup>そとほりのいらつめ</sup> 御名に衣通<sup>そとほりのみこ</sup> 王と負ふ所以は、其の身の光衣より通り出づればぞ(允恭天皇)」<sup>34)</sup>

注3) 『古事記』<sup>35)</sup>に次のような話がある。

葦原中国が完全に平定されたので、天照大御神・高木神は、天照大御神の子、正勝吾勝々速日天忍穗耳命に「降って統治せよ」と委任なされた。これに対し、正勝吾勝々速日天忍穗耳命が答えて、「私が降ろうとして身支度をしている間に、子が生まれ出ました。名は天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇々芸命、この子を降するのがよろしいでしょう」と言った。この御子は、高木神の娘、万幡豊秋津師比売命とご結婚なされて生んだ子であり、その御子は、天火明命、次に日子番能邇々芸命、二柱である。そこで、正勝吾勝々速日天忍穗耳命の言ったとおり、日子番能邇々芸命に命じて、「この豊葦原水穗国は、お前が治める国である。それゆえ仰せに従って天降りなさい」と仰せられた。そこで、天津日高日子番能邇々芸命は、五部族の長を従えて八重たな雲を押し分けて筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣に天降った。その後、笠沙の岬で美しい乙女に出会った。名を尋ねると「大山津見神の娘、木花之佐久夜毘売といひます」と答えた。そこで、その乙女に結婚を申し込むと、それを聞いた父、大山津見神は喜んで、姉の石長比売を副えて送り出した。ところが姉の方はとても醜かったので送り返し、妹の木花之佐久夜毘売とのみ結婚した。それで、大山津見神は「わが娘、石長比売を差上げたのは、天つ神である御子の命は雪が降り風が吹いても恒に石のごとく、いつまでも堅固でいらっしゃるように、また、木花之佐久夜毘売を差上げたのは、木の花の栄えるがごとくお栄えになるようにと誓言を立ててのことだったので。ところが今このように石長比売をお返しになって木花之佐久夜毘売のみをおとどめになった。故に天つ神のみ命は木の花のようにみじかくあられるでしょう。」と言った。こういうわけで今に至るまで、天皇達の御寿命は長くはないのである。

注4) 生・老・病・死・愛別離苦—愛する者と別離する苦しみ・怨憎会苦—怨み憎んでいる者に会う苦しみ・求不得苦—求める物が得られない苦しみ・五蘊盛苦—人間の肉体と精神が燃えさかる苦しみ

注5) 2005年3月の「児童生徒の「生と死」のイメージに関する意識調査を生かした指導」<sup>36)</sup>によると、「死んだ動物が生き返ると思いますか」という問いに「はい」と答えた小学生が12.7%、「死んだ人が生き返ると思いますか」という問いに「はい」と答えた中学生が15.4%だったという。(調査対象は、長崎・佐世保・島原・五島・壱岐・対馬の公立小学校の第4学年及び第6学年、公立中学校の第2学年。調査方法は、対象学年

の児童生徒、各 1,000 人程度を抽出して実施。調査期間は 2004 年 11 月～12 月)  
 注 6) 誤りというよりはむしろ、おじいさん・おばあさんと帝をあえて一体化したものと思われる。この絵本では帝は登場せず、しかし、他の絵本にはほとんど出てこない不死の薬は登場させている。そのため、おじいさん・おばあさんが不死の薬をもらってそれを処分したことになるのであるが、その処分の仕方は「たかいたかいやまに埋めた」とあり、この点は、なぜ高い山である必要があったのか意味がなくなる。天に近い山ということで高い山を求めたのである。燃やした煙が天へ向かって立ち上るのでなくてはならない。

付図 1 国立国会図書館蔵 竹取物語上<sup>37)</sup>  
 コマ番号 3



付図 2 国立国会図書館蔵 竹取物語下<sup>38)</sup>  
 コマ番号 22



付図 3 宮内庁書陵部蔵 竹取翁并かぐや姫絵巻物<sup>39)</sup> 第 5 コマ



付図 4 小林古径画 竹取物語 第四段 別離<sup>40)</sup>



付図 5 國學院大學図書館蔵 竹取物語絵巻(小型絵本) 下巻第 5 図<sup>41)</sup>



付図 6 國學院大學図書館蔵 竹取物語絵巻 第三巻<sup>42)</sup>



### 謝辞

付図 3 については宮内庁書陵部よりカラーポジフィルムを貸与していただきました。ご高配に感謝申し上げます。ありがとうございました。

付図 4 については、京都国立美術館より転載をご許可いただきました。ありがとうございました。

付図 5, 付図 6 については國學院大學図書館より精細画像をお送りいただきました。ご高配に感謝申し上げます。ありがとうございました。

### 引用文献

- 1) 甲斐睦朗ほか 41 名：『国語 五 銀河』，光村図書，pp.56-59 (2015)
- 2) 田近洵一・北原保夫・三木卓ほか 43 名：『ひろがる言葉 小学国語五下』，教育出版，pp.32-33 (2015)
- 3) 小森茂ほか 43 名：『新編新しい国語五』，東京書籍，pp.104-105 (2015)
- 4) 中瀬清史 ほか 39 名：『小学生の国語三年 学びを広げる』，三省堂，pp.46-47 (2015)

- 5) 文部科学省：『学習指導要領「生きる力」第2章各教科第1節国語』，[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/koku.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/koku.htm) (2017.9.28)
- 6) 片桐洋一：「竹取物語 解説」，『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語 (新編日本古典文学全集 12)』，小学館，pp.81-106 (1994)
- 7) 福田景道：「古典文学教材としての『竹取物語』：教科内容学からの授業デザイン」，『島根大学教育学部紀要 教育科学・人文・社会科学・自然科学』，48 別冊，pp.63-72 (2015)
- 8) 吉田雅憲：「『竹取物語』授業化の構想：絵本「かぐや姫」を援用する音読学習の試み」，『西南学院大学人間科学論集』，8 (2)，pp.1-25 (2013)
- 9) 出雲路修校注：『日本霊異記 (新日本古典文学大系 30)』，岩波書店，pp.112-113 (1996)
- 10) 河野多麻校注：『宇津保物語 1 (日本古典文学大系 10)』，岩波書店，p.54 (1959)
- 11) 久保木寿子：「絵本・絵巻と物語表現：『かぐやひめ』の背景」，『白梅学園短期大学紀要』，40，pp.1-21 (2004)
- 12) 中島和歌子：「中学校国語教科書『竹取物語』の挿絵をめぐる問題点と可能性：『竹取物語絵巻』昇天図の解釈と分類」，『札幌国語研究』，12，pp.25-48 (2007)
- 13) 齋藤緋紗依：「竹取物語絵巻研究：チェスター・ビーティー・ライブラリィ本を中心に」，『共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要』，21，pp.237-272 (2015)
- 14) いもとようこ文絵：『かぐやひめ』，金の星 (2008)
- 15) 野地潤家，新井満ほか 28 名：『中学校国語 1』，学校図書，p.179 (2016)
- 16) 甲斐睦朗ほか 27 名：『国語 1』，光村図書，pp.146-157 (2016)
- 17) 中正堯ほか 39 名：『現代の国語 1』，pp.104-115，三省堂 (2016)
- 18) 田近洵一，北原保夫ほか 32 名：『伝え合う言葉 中学校国語 1』，教育出版，pp.110-119，pp.308-309 (2016)
- 19) 三角洋一，相澤秀夫：『新編新しい国語 1』，東京書籍，pp.139-147 (2016)
- 20) 15) と同書，pp.172-181
- 21) 堀内秀晃，秋山虔校注：『竹取物語 伊勢物語 (新日本古典文学大系 17)』，岩波書店，p.76 (1997)
- 22) 6) と同書，pp.76-77
- 23) 14) と同書
- 24) 岩崎京子文；長野ヒデ子絵：『日本の民話えほん・かぐやひめ』，教育画劇 (1998)
- 25) 江國香織文；立原位貫絵：『竹取物語』，新潮社 (2008)
- 26) 円地文子文；秋野不矩絵：『かぐやひめ』，岩崎書店 (1967)
- 27) 千葉幹夫文；織田観潮絵：『新・講談社の絵本 かぐや姫』，講談社 (2001)
- 28) 土家由岐雄文；朝倉撰絵：『竹取物語より かぐやひめ (世界おはなし絵本 9)』，偕成社 (1966)
- 29) 西本鶏介文；高橋信也絵：『かぐやひめ (アニメむかしむかし絵本 13)』，(1991)
- 30) 平田省吾文；高橋信也絵：『かぐやひめ (世界名作ファンタジー 26)』，ポプラ社 (1987)
- 31) 船崎克彦文；金斗鉉絵：『かぐやひめ (日本名作おはなし絵本)』，小学館，(2009)
- 32) 柳川茂文；中島ゆう子絵：『かぐやひめ (日本昔ばなしアニメ絵本 4)』，永岡書店 (2011)
- 33) 森山京文；宇野亜喜良絵：『日本の物語絵本 竹取物語 19』，ポプラ社 (2006)
- 34) 小島憲之，直木孝次郎，西宮一民，蔵中進，毛利正守校注・訳：『日本書紀 (新編日本古典文学全集 3)』，小学館，p.11 (1996)
- 35) 山口佳紀，神野志隆光校注・訳：『古事記 (新編日本古典文学全集 1)』，小学館，p.317 (1997)
- 36) 長崎県教育庁学校教育課編：『心を育てる道徳教材集』 (2005)
- 37) 国立国会図書館：『竹取物語上巻』，「国立国会図書館デジタルコレクション」  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1288448> (2017.10.31)
- 38) 国立国会図書館：『竹取物語下巻』，「国立国会図書館デジタルコレクション」  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1287166?tocOpened=1> (2017.10.31)



- 39) 宮内庁書陵部図書寮文庫書陵部：『竹取翁并かぐや姫絵巻物』，「宮内庁書陵部図書寮文庫書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」，<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Viewer/1000275910000/4163f4a7b3b04653b4e0ef4f6b9ec232> (2017.10.31)
- 40) 小林古径画：「竹取物語 第四段 別離」，(1917)「京都国立近代美術館蔵独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム」，<http://search.artmuseums.go.jp/recordsphp?sakuhin=150457> (2017.9.28)
- 41) 國學院大學図書館蔵：「竹取物語絵巻 (小型絵本) 下巻第5図」
- 42) 國學院大學図書館蔵：『竹取物語絵巻 第三巻』，「國學院大學デジタルライブラリー」，[http://k-aiser.kokugakuin.ac.jp/digital/diglib/taketori-3/taketori3\\_87.html](http://k-aiser.kokugakuin.ac.jp/digital/diglib/taketori-3/taketori3_87.html) (2017.9.28)

**参考文献**

- 1) 片桐洋一，秋山虔，伊藤敏子，目崎，徳衛編：『竹取物語・伊勢物語 図説日本の古典 5』，集英社 (1978)
- 2) 樺島忠夫：『本物の絵巻を現代語で読む 竹取物語絵巻』，勉誠出版 (2003)
- 3) 工藤早弓：『奈良絵本 下』，宮帯出版社 (1988)
- 4) 小嶋菜温子，小嶋菜温子，渡辺雅子，保立道久解説：『チェスター・ビーティアー・ライブラリー所蔵 竹取物語絵巻』，勉誠出版 (2008)
- 5) 諏訪市博物館：『竹取物語絵巻 (高島藩主諏訪家資料)』，[http://www.city.suwa.lg.jp/scm/siryousiryou\\_take/index.htm](http://www.city.suwa.lg.jp/scm/siryousiryou_take/index.htm) (2017.10.31)
- 6) 反町茂雄編：『日本繪入本及び繪本目録 愛蘭国ダブリン・チェスター・ビーティアー・ライブラリー蔵』，弘文荘 (1979)
- 7) 中野幸一編：『竹取物語 (奈良絵本絵巻集 1)』，早稲田大学出版部，(1987)
- 8) 中野幸一，横溝博共編：『九曜文庫蔵奈良絵本・絵巻集成 竹取物語絵巻』，勉誠出版，(2007)
- 9) 針本正行：「竹取物語絵巻の本文」，『国学院大学大学院紀要 文学研究科』，38, pp.1-32 (2006)
- 10) 針本正行：「國學院大學所蔵の繪入り物語 (シンポジウム 繪入りテキストの物語史：竹取・住吉等を中心に)」，『中古文学』，86, pp.15-24 (2010)
- 11) 龍谷大学仏教文化研究所編：『奈良絵本 (龍谷大学善本叢書 22)』，思文閣出版 (2002)
- 12) 渡辺雅子：「『竹取物語』絵本：メトロポリタン美術館蔵を中心に」，『中古文学』，86, pp.2-24 (2010)